

海外

論文

&

21世紀をリードする協同組合運動へ——ICA カルタヘナ総会

レポート

菅野正純（日本労働者協同組合連合会理事長）

《はじめに：協同組合運動と協同労働の歴史的価値が全貌を現した総会》

9月21、22日、コロンビアのカルタヘナで、ICA（国際協同組合同盟）総会がICA史上初めて中南米で開かれ、87カ国1200名以上の代表が出席して、ICA史上最大の規模で成功した。

ICA総会に先立って、9月18日には、労働者協同組合国際委員会CICOPAの理事会と総会が、19日には、17カ国・145人の参加の下、第5回CICOPA世界会議が、それぞれ開催された。

日本労協連からは、筆者と島村副理事長、玄幡事務局員が出席した。取り急ぎ、その「第一報」をお届けすることとしたい。

今回のICA総会は、国際協同組合運動と、とりわけその中でも、労働者協同組合・社会的協同組合における協同労働が、その歴史的な価値の全貌を浮かび上がらせた総会であったように思われる。

その背景には、バブル的な投機とその破綻を繰り返し、公共サービスの解体と営利化・市場化を進めて、人々からまともな労働と生活の機会を奪い、戦争と暴力をも呼び起こし



会場となったカルタヘナの風景

つつあるグローバル資本主義に対して、世界の民衆が、いよいよ真に主体となって、「倫理と価値を具えた連帯の経済」を創造し始めた事実がある。

何よりも、1980年の「レイドロー報告」以来、ICAが国際協同組合運動の現状を批判的に捉え直し、1995年マンチェスター大会で「協同組合のアイデンティティに関する声明」（定義・価値・原則）を定めて、21世紀を担いうる組織として自己変革を進めてきたことが、主体的な要因として決定的に大きい。

カルタヘナ総会では、とりわけ2001年以降の「バルベリーニ体制」の下でのICA組織



歓迎のセレモニー

改革を背景に、原則と価値こそが協同組合の固有の競争力であり、協同組合が経済的にも生き残れるだけでなく、むしろ21世紀において最もよく発展しうる経済主体であり、世界89カ国・8億2300万協同組合人によるICAは、「公正なグローバル化」をリードしうる最大の民衆運動でもあるという確信が共有された。

《貧困削減とディーセントワーク：国際公共政策の主体としての協同組合へ》

ICAカルタヘナ総会は、将来、国際協同組合運動の歴史的な転換点として記録されるのではないかとさえ、筆者には感じられた。『ICA年次報告2004』を読むと、改めてそのこと感が深い。

『年次報告2004』は、「ICAの使命(ミッション)」を、「全世界の協同組合を統一し(Uniting) 代表し(Representing) その役に立つ(Serving)」ことに求め、その基本観点から、2004年度を総括する。すなわち、

「原則・価値・定義」、民主的ガバナンス機構を通じて、国際協同組合運動を「統一」し、多国籍機関において諮問機関となり、

公的な認知を得て、各国政府に対しても新たな法制や行政手続を求めて、協同組合を「代表」し、協同組合開発や情報、会議・セミナー、協同組合貿易・事業、災害救援などを通じて、226会員組織に「役立つ」ことである。

「統一」「代表」の実績では、ICAが、1995年に定めた原則が、ILO(国際労働機関)の「協同組合振興勧告」や国連の「協同組合法制に関する指針」、各国の新しい協同組合法の中に取り入れられ、2004年には、「貧困削減とディーセントな(まともな)就労創出」に向けたICAとILOとの共同行動が始まったことが大きい。国際公共政策の最大の実行主体として、協同組合が登場、定着し、現に活動を前進させていることの意味を、正面から受け止めなければならないと思う。

ICAの大陸ごとの分権化も進み、「グローバル化された経済における協同組合の再設計」(アジア太平洋)「経済統合、社会福祉、雇用」(南北アメリカ)「協同のヨーロッパの建設」(ヨーロッパ)などをテーマに、それぞれの総会が04年に行われた。とくに中東欧の「移行諸国」を迎えて、どのようなヨーロッパを建設していくかを「拡大EU」が考える時に、ICAヨーロッパの発言権が増していくことに注目したい。

「役立つ」では、「コミュニケーション戦略」の活動の進展が目覚ましい。とくに、大衆的なニュースである『ICAダイジェスト』は、2004年度、計32号が出され、会員の協力によって、英語、スペイン語、ポルトガル語、ロシア語、イタリア語、フランス語で常時発行されている。

協同組合の教育、訓練、研究などあらゆる

情報にアクセスできる、「協同組合学習センター (CLC)」の設立も04年の重要な出来事といえる。これは、カナダ・ブリティッシュコロンビア大学のイアン・マクファーソン教授が、退職後設立した「協同組合研究所」を拠点とするものである。

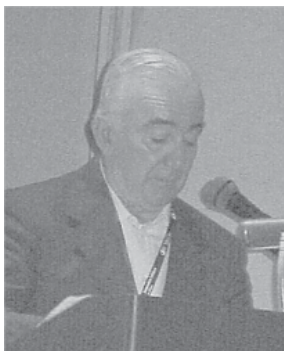
《協同組合固有の競争力としての価値と原則、その実践を問うた総会》

総会は、こうした2004年度の着実な発展を踏まえて、民主主義・公開・平等・相互扶助など、「協同組合の倫理と価値を共有し、市場における競争力をつくりだす資産として協同組合原則を実践に活かす」ことをテーマに開催された。

バルベリーニICA会長は、協同組合が「経済的な存在であるだけでなく、文化的・社会的な存在でもあることを忘れず、人々の必要と願いに応じて、社会正義と結びついた経済の発展を主張しよう」と訴えた。

総会オープンセレモニーに続いて行われた記念講演では、4人の演者が、民間営利企業にはない、協同組合の固有の「競争力」を、さまざまな角度から論じた。

「エンロン」前副社長のシェロン・ワトキ



報告するバルベリーニICA会長

ンズ女史は、「社会的責任と価値が事業の成功を導く」と題して、アメリカ第7位の民間営利企業であったエンロンが、不正な経理や経営によって破産に至った経過を体験的に述べた後、「協同組合は組合員への説明責任や経営の長期的な持続可能性を大切にしている。この価値を決して手放さないことが重要だ」と警告した。

カナダ・ケベック州の協同組合銀行「デジャルダン・グループ」のアルバン・ダモアール会長は、世界の金融機関50位のうちに、7つの協同組合が入っていることを紹介するとともに、人々の共有財産を管理する立場から、経営の持続性に責任を持ち、民主的に権限を共有し、剰余の52%を、分配、スポンサー、寄付、教育などを通じて組合員とコミュニティに還元する、デジャルダンの経営の質を強調。協同組合資本の形成や青年の取り組み(「デジャルダン青年運動」)を支援していることを報告し、「コストを共同で負担し、主体的に関わりながら、協同組合世界の中で連帯を強めよう」と締めくくった。

ホセ・マニュエル・サラサール - シリナリスILO執行理事は、現在のグローバル化が、国同士や国内での不均衡を生み出し、まともな雇用の創出が世界の優先課題になると共に、貧困削減プログラムの42報告中、32が協同組合によるものであることを指摘。「『企業の社会的責任』が“はやり言葉”になる前から、協同組合にとってそれは現実だった」、「公正なグローバル化をもたらす上で協同組合以上のものは考えられない」と述べ、2006～2008年のILOの「地域の雇用と能力強化によるディーセントワーク戦略」での連携を訴えた。

スコットランド・スターリング大学のジョンストン・バーチャル氏は、ICAの委託を受けた報告で、「過去10年の課題が、価値と原則を知らしめることであったとすると、今後10年は、協同組合の価値と原則を事業と実践にどう活かすかに力点が置かれるべきではないか」と延べ、グローバル化への対応として合併だけでなく、小さい組織の連合による“地域から考え、グローバルに行動する”可能性を検討することや、従業員が持つ潜在力を活かすこと、世論や地域社会のリーダー、普通の人々に「協同組合で働くとはどういうことか」を伝える必要性などについて問題提起した。「いくつかの失敗の経験から、『協同組合』という言葉避ける傾向があるが、NPOの方向に行ってしまうとすれば、協同組合にとっては脅威だ。組合員を基礎とする組織としての協同組合を守ってほしい」という教授の言葉が印象的だった。

《労協・社会的協同組合の成長と協同組合運動の中での本格的な位置づけ》

ICA総会2日目(定款議事)には、会長にイタリア協同組合連盟(レーガ)出身のイヴァノ・バルベリーニ氏が再選された。また、総会で選ばれる15人の理事の中に、イタリア協同組合連合 Confcooperative(カトリック系)出身で欧州労協連 CECOP 会長のフェリーチェ・スカルビーニ氏と、ポーランド労協連合会のヤヌシュ・パシュコウスキー氏が選出された。「労協・社会的協同組合」の枠からICA理事が選ばれたのは、この数十年間なかったことである。

また、労協の基本性格・運営規則などを含

めた「労働者協同組合に関する世界宣言」(スペイン語・フランス語版では「協同労働に関する世界宣言」)がICA総会で満場一致で採択された。ICA総会で労協に関する議題が特別に議論されたのも、この数十年間で初めてであるという。

なお、CICOPA総会では、「モンドラゴングループ」出身で、「バスク協同組合連合会」のハビエル・サラベリア会長が、CICOPAの新会長に選ばれた。世界有数の工業協同組合や「労働人民金庫」、消費生協エロスキーを含む、地域社会の変革を目指す総合的な協同組合運動の代表者が、CICOPAの会長に座ったことは、大きな期待を抱かせるものと言える。

9月19日の第5回CICOPA世界会議は、「労働者協同組合・職人協同組合の地域開発に対する貢献」をテーマに開催された。優れた発言の中でも、とりわけ、バルベリーニICA会長の「協同組合運動における労働者協同組合」と題する挨拶や、ILOシュベットマン協同組合部長の報告「地域開発とディーセントワークのための労働者協同組合」、コスタリカ・コナコープのレヒドール理事長によ



議場での筆者

る保健・予防医療についての報告が印象的だった。

バルベリーニ会長は、「労働者協同組合の発展の機会となっているのは、『ディーセントワークの必要性』『経営危機に陥った企業の再建』『福祉の改革』であり、その発展を支えるものは、ILO 協同組合勧告、全般的な協同組合法制、協同組合企業発展に有利な環境の創造だ」、「競争力ある優れた



会議場の様子

企業になること(経済的挑戦)とともに、協同組合としてのかけがえのない独自性を保ち(価値的挑戦)、『ビジネスはビジネスだ』という支配的な文化に打ち克つこと(文化的挑戦)が求められる」、「より強い『協同組合運動』と『企業システム』の結合が不可欠。『運動』とは『革新』を意味することを思い起こそう」などと述べた。

シュベットマン部長は、ILO の年次報告が、『ディーセントワーク』(1999年)、『ディーセントワークの欠如』(2001年)、『貧困からの脱却』(2003年)と推移し、2004年の『公正なグローバル化』では、地域コミュニティの自力の強化、地域固有の資源による「地域的なディーセントワーク」を提起するに至ったことを紹介し、「地域開発」と「協同組合」が深い共通性と関連性を有していることを強調。参加的なプロセスを組織し、インフォーマル経済の担い手や労働者を組織し、「地域診断」や、地域開発フォーラムの開催に加わり、地域開発機関の一員にもなりうる、協同組合の活動に期待した。

コスタリカ・コナコープのレヒドール理事長は、労働者協同組合として運営されている保健協同組合が、予防医療や保健活動を通じて、国民の平均寿命の伸張や医療費削減に劇的に貢献し、公的制度による位置づけを勝ち取ってきた経過を報告した。CICOPA世界会議では、イタリアの保育協同組合の興味深い報告も行われた。

ICAのセミナーでも、南北アメリカの電力協同組合やイギリスの電話協同組合の報告がなされ、営利化・市場化を実態とする今日の「民営化」の流れに対して、公共サービスの「協同化」が世界的に取り組みられていることを確認できた。

あわせて実感されたのは、協同組合が公共サービスを担い始めるにつれて、労協が「社会的協同組合」の方向に発展する一方で、協同組合運動全体が縦割りを超えて協力して、働く人々・市民が担う「新しい公共」の創造に挑戦し始めていることである。

カルタヘナ総会の会場で配布されていた「総会ニュース」では、IHCO(国際保健協同

組合委員会)のギザード理事長と、CICOPAのサラベリアス新会長が懇談し、地域のレベルから協同組合各部門の強力な連携を強めることで合意されたことが報じられていた。その中でギザード氏が、健康の問題が、医学的な治療をはるかに超えて、良好な住宅や、適切な食料、きれいな水などといった要因が含まれること。協同組合運動には、そうした分野で働く組織がいくつも存在しており、もっと高度な協同と調整が必要とされていると述べていることに新鮮な感動を覚えた。

ICA 総会とCICOPAの会議を通じて、労協・社会的協同組合の活動が世界的に高まり、協同組合運動がその動きを位置づけながら、連帯して時代の根本課題に取り組み始めていることを、ひしひしと実感することができた。



バスク協同組合連合会ハビエル・サラベリア会長と